

いた吉田太社長(43か2)は、002年、日本初の遺品整理の専門業者として設立した。高齢の単身世帯の増加を受けて起業し、愛知県刈谷市に本社、名古屋と東京、福岡、大阪に支店を持つ。 料金は20万円から数十万円が相場だ。

07年の依頼約2000件のうち、孤独死の死者の遺族からが半数。しかし最近、「自ら孤独死を覚悟し、生前予約する人が始めている」と吉田社長は言う。

妻を亡くし、子どももない男性。体をこわして仕事を辞めたら友達が離れていったという女性。「死後

「私が死んだ後、部屋の片付けを頼めますか」  
先月、遺品整理会社「キーパーズ」福岡支店（福岡市東区）に電話が入った。福岡県内のアパートに一人で暮す50歳代の独身女性だという。

「病氣がうで、精神的にも弱っている。妹がただ一人の肉親だけど、先立たれるかもしれない」

口調はしつかりしている。社員は「まだお若い。一緒に世間話でも」と来社を誘った。女性は「通院が精いっぱい」と口ごもり、「部屋も散らかっている」と社員の来訪も拒んだ。料金を伝えた時だけ、女性の声が少し弾んだ。「その金額なら残せます」

10日たった知人の遺体を見つけてしまった。自分も一年息子に一年以上会ってない」という男性も生前予約を申し込んできた。

十数件だが、相談は頻繁に舞い込む。

した。福岡支店は、関東地方に住む男性の兄から遺品整理を依頼された。

部屋は電気が止められ、真昼でも薄暗かった。「ここに倒れていたそうです」。遺品整理に立ち会った兄が

社員に床を指す。社員は、遺品を可燃物、不燃物、貴重品に分け、段ボール箱に詰めるよう5人

新型も無料で渡す。  
ノートは、遺族に向か  
続方法や葬儀の希望を書き  
残すだけではない。「私」  
を記憶の中にとどめておい  
てほしいのです」と題した  
ページには、お気に入りの

る。家庭で、職場で、地域社会で。私たちを取り巻く制度やモノなどの環境もも変わってきた。つながれていたはずの手、触れ合っていなかったはずの心は、どこに向かおうとしているのか。

# この手の 先に

1



## 記憶に残して

兄は数年前に弟と電話で  
言い争い、疎遠だったとい  
う。「弟は両親の遺骨を持  
つていたはず」と社員に告  
げたが、半日かけて部屋を  
きれいにしても遺骨は見  
つからなかつた。代金約50  
万円は兄が支払つた。  
社員は「今回は家族に立  
ち会つてもりつただけでも  
幸せなほう」と言つた。「全  
部処分を。後はよろしく」  
と一言、鍵と代金を手渡す  
遺族もいた。「捨ててしま  
い」と預けられた段ボール  
に遺骨が入つていたことも  
ある。

同社が扱う孤独死では、团塊の世代を挟んだ60歳前後のケースも多い。がむしゃらに働き、リストラや転職で仕事や家、家族を失った男性たち。本人は自分の現状を恥じて閉じこもり、周囲も「あの人はずがどうい」と油断することがぞらに孤立を深める。

「この会社は、家族崩壊や住民との断絶という今の悪い風潮を後押ししているんじゃないのかと自問する」ともあります。福岡支店の事務室で、吉田社長は話した。

# 孤独死覚悟 生前の整理

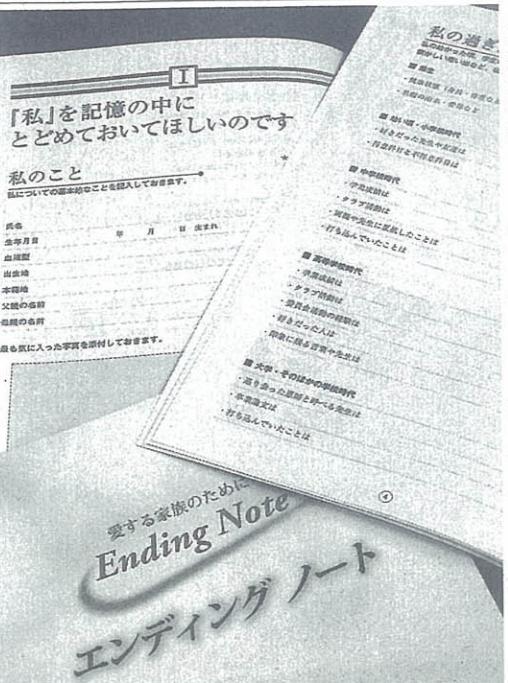


「キーパーズ」福岡  
の倉庫に運び込まれ  
品の数々。分類や処  
待つ=田中勝美撮影

自分の写真を張る欄や、幼少時代のあこがれだった仕事、学校時代に好きだった人の名前、思い出の旅行などを書き入れる。

吉田社長は「DVDもノートも、自分がこのまま孤独死へ向かっていいのか、誰かと接触を保つべきではないかと考え直してもらいたい」と語った。

(第三種郵便物認可)



# 孤独死を心配する人に配られるエンディングノート

# 自治体の 見守り進ます

政治小説の変遷

庚、瓜虫花方止。反つ且。

一合の瓜虫花が近年相次い

しかし、孤独死の実態把

ない」とも多い。

祉課は、お年寄りの話を